

文学の光景

伊 狩 弘

満洲文学は、狭義には大正末から終戦までの間に発行された幾つかの同人雑誌と総合雑誌の文芸欄に載った文学作品、さらに企業や官公庁の出す雑誌の一隅に掲載された文学作品、そして『満洲新聞』『満洲日日新聞』『哈爾濱日日新聞』などの文化欄に載った文学作品などを指すものである。例えば詩の方で有名な雑誌『亜』は大連に住んだ安西冬衛を中心に大正13年から昭和2年まで発行された。安西の「春」という詩「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」はよく知られる。韃靼海峡は間宮海峡のことで、大連とは全く離れているが、海峡を越えて飛ぶ蝶は亜細亜の浪漫を感じさせる。『哈爾濱日日新聞』は新見南吉が友人の紹介で『屁』などを寄稿した。

『満洲浪漫』という文芸誌は昭和13年に刊行された。満洲国の元号では康德5年である。内地ではプロレタリア文学の瓦解の後を受け、昭和10年に『日本浪漫派』という雑誌が刊行され、古典文学回帰、日本精神鼓吹といった文芸思潮が盛んになった。『満洲浪漫』を主宰した北村謙次郎は『日本浪漫派』の同人で渡満した。跋文に「旺んなる満洲ルネサンスの思潮に拍手をおくる」とある。満洲ルネサンスという壮大で悲しく愚かしい夢想であったのだ。『満洲浪漫』創刊号に「満洲文化について」という寄稿欄があり、諸氏が投稿している。西村真一郎は「世界観の学問的体系樹立」という大袈裟な文章を書いている。曰く「一定の国家が建設され尚建設の途を歩んでゐるとき、之に伴ふ文化建設も亦当然その国家の世界観に立脚するものであることは今更に云ふまでもないことである。」云々と建前論のような言説に終始している。日本の帝国主義は傀儡国家の満洲国を作って国際連盟を脱退し、戦争に進んだわけだが、底抜けとか虚妄の満洲ロマンはやはり無理があつて、嘘っぽい。福田清人は小説家兼文学研究者で、『硯友社の文学運動』『俳人石井露月の生涯』などの著書もあるが、昭和14年に大陸開拓文芸懇話会を結成し、以後満蒙文学や大政翼賛会・文学報国会などに携わった。満洲開拓叢書第七輯『大陸開拓と文学』（昭和17年10月）に福田は「大陸発見と日本文学」と題して、「日本が大陸を発見したことは、もちろん古い。明治年間の二大戦争もそのためであつた。満洲事変もそのためであつた。しかし、民族のすべてが血肉のなかに大陸をはつきりと発見したのは、ここ数年来のことではないか。／かつての戦争に幾万といふ血や肉がそこにさゞげられた。その血や肉は今日生きる同胞がそこを強く発見するための聖い犠牲であつたのだ。しかしながいことたゞ満鉄の鉄路沿線に、殖民地的商人が進出するにとどまつた。」などと書く。「大陸発見」はなんだかコロンブスを連想させ、益々誇大妄想的である。福田は同書に「東宮大佐の詩句」という章を設けて紹介しているし、東宮の伝記も著した。東宮鉄男（かねお）は陸軍軍人で張作霖爆殺事件の実行者、満蒙への移民を推進した中心人物である。昭和12年に上海近くで戦死し「うれしさや秋晴れの野に部下と共」という辞世の句を残す詩人でもあつた。

関東軍という厳めしい名前の軍隊は山海関の東側の関東州の軍隊を指すのだが、旧日本軍の古い軍人には東宮の他にも詩人のような面を併せ持つ人が多かったようだ。日本古来のもののふの面目であろうか。

もののふの文学と言えば、乃木希典の「金州城下作」などをまず挙げなければならない。「山川草木轉荒涼／十里風腥新戰場／征馬不前人不語／金州城外立斜陽」は乃木が金州を訪れ、長男勝典ら戦死者の霊を弔った際作った漢詩で、戦前は誰もが知っていたと思われる。詩碑が旅順監獄の記念室にある。冒頭の述べたように満洲国の文学は大正末の『亜』あたりから昭和7年3月に満洲国成立を経て終戦までの文学であろうが、満洲文学はだいたい日露戦争を始まりと見てよかろう。また旧制旅順高校は昭和15年に設立された最後の旧制高校で、そこを退学処分された宇田博の作った「北帰行」も満洲文学に含められよう。「北帰行」は旅順高校の寮歌として広まった。「窓は夜露に濡れて都すでに遠く、北へ帰る旅人一人涙流れてやまず」以下のこの歌には、満洲のロマンチズムが国家主義の弾圧によって敢え無く蹂躪された恨み節が漂う。

夏目漱石は親友の中村是公の招きで明治42年9月に大連やハルピンを訪れ、『満韓とところどころ』を書いた。「南満鉄道会社つて一体何をするんだいと真面目に聞いたら、満鉄の総裁も少し呆れた顔をして、御前も余つ程馬鹿だなあと云つた。」に始まる風変わりな紀行文は漱石らしい高踏的なもので、日露戦争で十万人もの日本人の死傷者を出して手にした満洲を漱石は距離を置いて眺めている。その距離感がユーモアを生んでいるのである。

田山花袋は日露戦争に従軍して『第二軍従征日記』を書いたが、それから20年近く経った大正12年に満洲を再訪し、『満鮮の行楽』を書いた。こちらは漱石とは違って日本軍とロシア軍との息詰まる戦いに思いを致し、厳粛の感に打たれた様子が伝わる文章である。旅順の白玉山の表忠塔に上るとき、ステッセルやコンドラチェンコも住んでいた町を眺め、花袋は次のように感懐した。

「私達は一度停車場前に戻つて、そこで昼飯を食つて、また出かけて来た。私達は小さな谷に沿つたやうな路を幾曲にも折れて曲つて上つて、漸く招魂祠のある平らなところへと出て来た。そこから表忠塔は高く高きながらベールの塔でもあるかのやうに立つてゐるのが仰がれた。少し此方に来たところからは、徒崖と港湾とに囲まれた旅順の旧市街—ステッセルやコンドラチェンコの当時の住宅を今でも持つてゐる旧市街がはつきりと手に取るやうに見えた。私はじつとそこに立尽した。私は三方から圧迫して来る敵のためにその運命の已に夕に迫つてゐる当時のさまを眼の前に浮べた。恐らくその時は榴火弾がその低地の到るところに唸つて飛んで来たであらう。或は屋根の角に、或は大地の上に、或は樹の梢にそれが当つて炸裂して白い黄色い煙を凄じくあたりに颯げたであらう。あちこちから火も起つたらう。人馬も走つて行つたらう。そこに立て籠つてゐた人達は殆ど生きた空もなかつたらう。かう思ふと、曾てロシア方の通信で読んだ当時の悲惨な光景が再び歴々と私の眼の前に蘇つて来るのを覚えた。」

花袋の紀行文は漱石のとは違い、状況や歴史に密着した感慨に満ちている。

さて、満洲を五族協和、王道楽土の理想国家と考えた人々にとっては日本人の文学だけではなく、漢人（台湾を含む）・満洲人・蒙古人・朝鮮人・日本人のすべての民族の文学を含めた大東亜文学の中の満洲文学が成立する必要があった。昭和17年11月3日から東京で大東亜文学者大会

が開かれ、日本人作家のみならず、満洲や中国、朝鮮の作家たちも参加し、大東亜文学大賞が様々な民族の作家に授与されたのである。17年の大会では島崎藤村が聖寿万歳の音頭を取ったことも知られる。こうした動きも満洲文学に含められるだろう。満洲国が出来た後の開拓民の文学などは、国策文学、官製文学の誹りは免れないが、全体として見れば満洲と満洲文学には、負の遺産だけでなく、今の時代を照らす契機となるようなレガシーも見えて来るように思う。

